

社会人生活 35 年目、医療分野にはまったく素人だった私が、思いがけずヘルスケア・スタートアップ企業の取締役役に就任したのは、コロナ禍が落ち着きを見せ始めた頃でした。「業界の方々ときちんと会話ができるだけの最低限の知識が必要だ」という切実な思いから、2 年前、放送大学大学院の生活健康科学プログラムに入学することを決意しました。

長年のビジネス経験を持つ私は、正直「何とかなるだろう」と高を括っていました。しかし実際に学び始めると、アカデミアの世界の思考法や作法は、ビジネス現場とは大きく異なることを思い知らされました。論文の読み方、研究データの分析手法、そして科学的思考の厳密さは、正直想定していた以上でした。

また平日は企業の取締役役として忙しい日々を送りつつ、夜間や週末を使って講義やゼミに参加する生活はやはり厳しいものでしたし、家族や友人との時間の確保と両立もまた難しい選択の連続でした。

しかしその一方で、多様なバックグラウンドを持つ社会人学生たちとの交流は、本当に新鮮で刺激的でした。医療従事者、教育関係者、行政職員など、異なる分野で現役で活躍する仲間との議論は、私の視野を大きく広げてくれました。実社会での経験を踏まえた意見交換ができることは、社会人学生ならではの強みだと感じています。

思えば私にとって修士論文の研究プロセスは特に厳しいものでした。テーマ設定から先行研究のレビュー、実験計画の立案まで、すべてが新しい挑戦でした。「多角的なアプローチと統計的有意性の検証」という厳格なプロセスは、ビジネスの世界では経験できない貴重な学びとなりました。実験データが思うように出ず、何度も分析をやり直す日々。指導教授からの指摘に落ち込むこともありましたが、その過程で培われた批判的思考力と問題解決能力は、ビジネスの現場にも応用できる貴重な資産となりました。

そしてこの 2 年間の学びを支えてくれたのは、周りの多くの方々の理解と協力でした。弊社グループ社長と会社の同僚たち、指導担当の川原教授とゼミ仲間たち、実験に協力してくれた友人や弊社のお客様たち。何より、日々の生活を支え励ましてくれた妻の存在が、この挑戦を成し遂げる大きな力となりました。

今、修士課程修了を迎え、改めて感じるのは学びの奥深さです。社会人としてのキャリアだけでは得られなかった新たな視座を得たことで、私自身の可能性も広がりました。

社会人の皆さんにとって、大学院での学びは楽な道のりではないのかもしれませんが、仕事との両立、研究の厳しさ、時間管理の難しさ、そのすべてが挑戦です。しかし、その先には必ず新たな可能性と成長が待っています。ビジネスとアカデミアの両方の視点を持つことで、より複雑化する現代社会の課題解決に貢献できる人材になれると信じています。もし迷っている方がいれば、ぜひその第一歩を踏み出してみてください！

修士課程を無事に修了し、ようやく一息ついた 5 月のある日、ゼミの先生から「体験談を書いてもらえないか」とご連絡をいただきました。仕事と論文執筆に追われ、休日も返上で取り組んできたものの、達成感を味わえるほどの研究成果は残せず、大学にあまり貢献できていないのではという思いもありました。そんな中でのお声がけに、「これから大学院を目指す方の参考になるのであれば」と思い、ありがたくお引き受けしました。

私が放送大学を選んだ理由は、理学療法士として大学病院に勤務しており、研究や学会発表が日常的であったこと、そして部門を任される立場となり、後輩の育成や組織運営を担う上で、体系的に学び直す必要性を強く感じたことが大きな動機でした。また、多職種と連携する機会が増えるなかで、自分の専門外の方にも分かりやすく伝える力を身につけたいと考えるようになったことも背景にあります。放送大学の先生方は、各分野の第一線で活躍されている著名な研究者ばかりで、理学療法士という枠を超えた学びが得られる点にも大きな魅力を感じました。2021 年に修士科目生として履修を開始し、修士選科生を経て、2023 年度から修士全科生として本格的に学び始めました。放送大学大学院の授業を通じて、臨床で何気なく行っていたことが学問的にしっかり裏付けられていることに気づき、知識への渴望がいっそう高まりました。「もっと若いうちに進学していれば、より多くの研究成果を残せたのでは」と思うこともあります。家庭や子育て、フルタイムの仕事との両立には限界もあり、子どもたちがある程度成長してからようやくスタートを切ることができました。

研究テーマは「心不全患者が地域でも安全に運動療法を継続できる方策の検討」でした。テーマが大きく、明確な成果を出すには至りませんでした。関根先生の根気強いご指導や、口頭試問で「対象者一人ひとりを大切にする姿勢」にふれたことは、忘れがたい学びとなりました。入試の倍率は 1.95 倍。学力に自信がないうえに早とちりしやすい私で、「入学してやっていけるか心配だった」と先生から言われたときは、恥ずかしさと申し訳なさでいっぱいでしたが、それ以上に、あのとき一歩踏み出して本当によかったと思います。自ら動くことを導きたくさんの学びを与えてくださった先生方には感謝の気持ちしかありません。

修了後の今、多職種連携の現場で「伝える力」や「学び続ける姿勢」の大切さを日々実感しており、大学院での経験は、私にとってかけがえのない財産となっています。

高齢者介護・障害者支援の仕事を通して多くの当事者と関わり、様々なケースに遭遇してきました。支援をはじめるにあたって、その人がどのように生きてこられたのか、ご家族との関係や周囲の人々の思いなど、取り巻くものや背景を把握してから支援を開始します。その中で精神障がい者支援には、高齢者介護や他の障害者支援とは異なる特有の問題群が存在しており、それらを考えるために修士課程生活健康科学プログラムの門を叩きました。

仕事や家のことをしながら勉強の時間を捻出するのは一苦勞でした。毎晩11時から履修科目を視聴し、印刷教材を常に枕元に置いて寝落ちするまで読んでいました。研究指導や課題提出の前日は、必ず有給休暇を入れて深夜までレポートを書いていました。職場で日中眠くなることもありましたが、昼休みに車の中で仮眠をとってしのいでいました。このように書くと大変そうな感じがしますが、私がそう感じたのは最初の半年ぐらいでした。履修科目の学習や、川島先生の研究指導を受けるうち、視野が広がってきて自分の中で何かが変わり、今までと違った景色が見えるようになってきたのです。それは私にとっては寝不足の眠気も吹き飛ばすようなワクワクする体験でした。もっと知りたい、考えたいという欲求で多少興奮状態だったかもしれません。

川島先生の研究指導では、先行研究についてまとめたレポートをもとに、毎度「なぜ同意するのか、しないのか」「根拠は何か」「データはないか」「別の見方はないか」「どのような文脈で筆者はそう述べたと思うか」「それは自分の意見か、すでにあるだれかの意見か、だれかの意見ならばその人はなぜそう主張しているのか」等々、丁寧に指導していただきました。まるでスプーンで頭の中をグルグルかき混ぜられたような感覚を覚えるほどでした。

頭が固い上に研究のイロハもわからない私に、考え方の例を示してくださったり、理解できるよう表現の仕方を変えて話してくださったり、ごく初歩的な質問にも詳しく答えてくださったり、先生の辛抱強さと熱心さに毎度感動していました。

障がい福祉の現場には、困難な問題が常に山積しています。様々な障がいのある人を地域社会に包括することの難しさは、法や制度を整備するだけでは解決しません。多様性を受け入れることへの人々の感情的な抵抗感や資金不足・人手不足など、出口のないトンネルの中にいるような閉塞感を感じることもしばしばです。しかし、思考するということは、思い込みや決めつけを突破して答えを探し続けることであり、考え続ける限り、解決の可能性はいつも存在しているのだと教えていただきました。私にとって大きな学びであり、希望となりました。いつかまた、川島先生のご指導を受けられるように、今後は精神障害者支援の専門的な知識を学び、さらに経験を積んで参りたいと思っています。

2年間、本当にありがとうございました。

私は放送大学へ入学する以前は海外で生活をしており、夫の再就職を機に五島列島の二次離島に移住しました。帰国したら専門である看護師や助産師として働きたいと思っていましたが、高齢過疎が深刻な島には私が働ける場所が無く悩んでいました。そのような時に放送大学を知り、学ぶことでスキルアップに頑張ろうと考えました。

修士課程の二次試験の直前に、私は大きな決断をしました。島内唯一の商店が閉店を余儀なくされ、買い物難民ができてしまうことを危惧して、私自身が小さな商店を立ち上げたのです。お店を始めてしばらくすると、いつも来る高齢者が買い物に来ないと心配になり、また遠方に住む高齢者の安否が気になるようになりました。この小さな心配がきっかけとなり、地域互助を活用した新しい高齢者の見守り活動を島内に取り入れ、修士論文にまとめようと思いました。

私は田城孝雄先生にご指導していただきましたが、第一回目のゼミは忘れもしません。同期の多くは医療や福祉の分野で活躍されており、既に研究内容が明確となっている方が多いなか、まだ漠然としたものしかなかった私はただ焦りと不安でいっぱいでした。そのゼミからの帰路、フェリーの中で偶然に見つけた五島市のクラウドファンディングの企画募集の案内に、私は目の前が開けた様に感じました。研究資金の調達により私が思い描いていた見守り活動が現実味を帯びた瞬間でした。クラウドファンディングは成功し、タブレット端末15台の購入費と通信費を得ることができ、市内外への広報にもつながりました。そして島民の間でタブレット端末を利用して特定の高齢者がお元気であるという情報を共有する、「見守りネットワーク」を作り上げました。2年で大きな成果が得られ、修士論文にまとめることができました。そして現在その「見守りネットワーク」は島全体の取り組みとして活用されるようになりました。

田城先生のゼミはとてもユニークです。修士課程の学生だけではなく卒業研究生、博士課程の学生、OBやOGも参加され、専門分野や職種、さらに研究内容もとても多様です。視野が広がるだけでなく、他の方々の研究から多くの示唆や気づきをいただくことができました。また同じ分野の先輩方からもご指導を受けることができ、多くの学びに繋がりました。

五島からゼミの為に東京へ行くのは楽しみである反面、時間も交通費も嵩みました。しかし昨年度からは新型コロナの影響で放送大学のゼミはオンライン開催となりました。また常日頃からメーリングリストを通して活発な意見交換

がなされており、先生や先輩方からのご指導を受けることもできました。このようにインターネットの活用により物理的な距離を感じ無くなったことは、地方の学生にとっては大きなメリットであり、進学や学習継続への障壁が下がったように感じています。地方在住の方も諦めることなく是非、修士課程への進学を志して欲しいと思います。